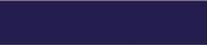


	学校名: 渋谷区立松濤中学校	
	氏名: 石井 誠	● 実践教科等: 英語
		● 時間数 : 7時間
THAILAND	[担当教科: 英語]	● 対象生徒 : 中学2年生
		● 対象人数 : 32人×2クラス

1 単元名

Lesson6 My Dream

2 単元の目標

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ① 世界の中学生の夢から、その国が抱える問題について理解しようとする態度を育てる。(未来像を予測して計画を立てる力)
- ② 国際的な支援のあり方についてその意義を理解し、相互依存の関係を理解する。(つながりを尊重する態度)
- ③ タイにおける支援の現状を理解し様々な選択肢の中から最適な支援を考える。(多面的、総合的に考える力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

多肢選択型の問題から自由意見へと発問を広げることで子供の多様な考えを引き出す。【2】
 ペアワークやグループワークを用いて他者の意見と自分の意見を比較し考えを深める。【3】【7】
 自己評価カードを記入することにより学びを振りかえる機会を提供する。【6】

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は職業観を大きく育成するために効果的な教材である。また本単元と並行して行われた職業体験についても授業内で関連して扱うことで生徒自身の経験と教科指導を密接に結びつけることもできる。近年は国内に向けて職業選択を考える傾向にあるが、今後の国際的な社会発展も視野に入れ、青年海外協力隊と支援のあり方について考えを深める教材を取り入れた。海外で活躍する日本人のエピソードを教材に含めることで多文化に対する理解を深め、支援の方法について自分の考えをもつことでコミュニケーション能力を育みたい。教科指導を通じて、地球市民としての職業観を育成し、世界における様々な課題を生徒に考えさせ、自分だったらどうするかという課題解決能力も身に付けさせるように指導を進める。

(2)生徒観

国際理解に対する学習意欲は概ね高い傾向にあるが、積極的に発言する生徒と、おとなしい生徒の差が見られる。そのため自由に発言し自分の意見を述べる形の授業では一定の生徒に発言が偏りがちである。そのため、帯活動でのペアワークや、全員が授業に参加できるようグループワークの場面を用いて生徒の言語活動の場を増やすよう工夫した。また、授業においては小集団内での発言から全体での発言へ段階を踏んで意見を発表する場を設定した。クイズなどの活動ではタイマーを使って時間を制限するなどし、生徒の意識を授業に集中させるようにしている。英語が苦手な生徒については、

Yes/No で答えられるようなシンプルな英語の質問に答えさせるという配慮をする。グループ活動においては積極的な生徒を中心的に活動させ、全体的に活気のある教室環境を形成したい。

(3) 指導観

指導にあたっては、道路や学校といったハード面でのインフラだけでなく、コミュニティの開発や地域に根差した適切な支援といったソフト面での理解も進めていく。また、英語を基本として授業を行うことから内容に関しては平易な語を使用するように意識し、単元のとめの際に生徒が英語でコミュニケーションを取れることをねらいとする。また様々な働き方を理解することから、自らの職業選択に結びつけることができるよう理解を促す。教科指導を通じて様々な場面を生徒に考えさせ、状況に応じた支援について多角的に考えることのできる視点をもたせたい。

5 評価基準

観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語の理解の能力	言語・文化についての知識・理解
評価規準	①授業中の問いかけに反応しようとしている。 ②ペアワークなどの言語活動において、積極的に取り組もうとしている。	① I give.. I think.. といった表現を正確に使用し、自分の考えを表現することができる。	①国際協力に関する説明を聞いたり読んだりして、その内容を理解することができる。	①英文で書かれた表示や案内をみて理解することができる。 ②国際協力に関する用語や支援の意図について理解することができる。
評価方法	授業中の発言・学習の様子・プリントへの取り組み状況			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	・ What is their dreams?	・職場体験と本単元の関連を高める。 ・学校の先生や有名人が昔なりたかった職業は何か予想することで職業選択の理由について考える。 ・様々な職業があることを理解し、成長するにつれ職業観も変わっていくことに気付かせる。	・職場体験で行った職種について英語で述べさせる。 ・クイズを出して、学校の先生や有名人が何になりたかったか考える。 ・学校の先生へインタビューしたビデオを見せ、その人がこれまでに経験してきたことや変化について気付かせる。
2	・ What is your dream?	・経済環境によって生活が制限されたり、自由に勉強ができなかったりすることについて理解する。 ・スラムでの生活について理解する。 ・オラタイさんの経験から自ら夢を実現することができることを知る。	・カードゲームを行い、自分の興味が将来の職業に結びつくことを理解するとともに、生活環境によって職業選択が制限されることに気付かせる。 ・スラム地域の生活ではどのような生活が営まれているか、ビデオを見て理解する。スラムはどのように形成されるか。 ・オラタイさんの経験から自分の行動と、必要な支援を行うことで、興味のある職業に就くことができることを知る。
3	・ What is good supports?	・様々な支援の形について知る。	・青年海外協力隊の活動を理解して、どのような職業の人が働き、協力しているのか理解する。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

		<ul style="list-style-type: none"> ・状況によって最適な支援の方法が変わることに気づく。 ・ケースによる自分の考える最適な支援について考えを述べるができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際機関や NPO の行っている支援のケーススタディを行い、なぜ最適な支援だったか考える。 ・アジアやアフリカにおける家庭を想定して、その人に対する最適な支援や、関わりについて意見を述べるができる。
4-6	What do you want to be?	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習を統合し、自分の興味や環境の強みを生かした職業について考えを書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを配布し、自分の興味があること、好きな教科などをマインドマップとして視覚化し、自分の夢について考えを深める。
7	Speech -My Dream	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の夢をクラスの前で発表することで、自らも社会の一員であることを理解し、責任をもって 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の夢について 150~250 語程度でスピーチを行う。

7 授業事例の紹介

小単元名【 What is good support? 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月8日(木)第2限

(イ)実施会場 2年B組教室

(ウ)本時の目標

- ① タイにおける日本からの支援を理解する。
- ② 様々な支援の方法の中から最適なものを選択し、考えを深める。
- ③ I give... I think (that) ... などの表現を使い、支援の方法について自分の意見を述べる。

(エ)指導のポイント

指導にあたっては支援の方法について、道路や学校といったハード面でのインフラだけでなく、コミュニティの開発や地域に根差した適切な支援といったソフト面での理解も進めていく。また、英語を基本として授業を行うことから内容に関しては平易な語を使用するように意識し、単元のまとめの際に生徒が英語でコミュニケーションを取れることをねらいとする。また様々な働き方を理解することから、自らの将来の職業選択に結びつけることができるよう理解を促す。教科指導を通じて、様々な場面を生徒に考えさせ、自分だったらどうするかといった課題解決能力も身に付けさせるように指導を進める。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 3分	Warm up 3min.	単語バトルシートで重要表現や頻出単語について確認する。	ペアワーク	積極的に問題を出し合うよう促す。	ペアワークなどの言語活動において、積極的に取り組もうとしている。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度②】
展開 32分	Review 7min.	前時で学習したオラタイさんの職業や経歴について確認する。 興味のあることが将来の職業選択に結びつき、結果として貧困から抜け出せたこ	一斉指導	生徒が理解できる英語で話す。 ヒントをもとに、単語レベルでもいいので答える。	国際協力に関する説明を聞いて、その内容を理解することができる。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

		とを理解する。 What is her job? What was she interested in? Where did she study?			[外国語理解の能力①]
	Case study1 15min.	タイにおける支援について 選択肢を示しながら、必要とされる支援は何か理解を深める。【Case1~4】【2】 【Case1】 Imagine we want to change their life. We will... a. give money b. build new houses c. do clean campaign d. teach how to get money If you give money, they don't work.	グループワーク	話を集中して聞く。 質問に答える。 内容に関する質問に対して答える。 参加しない生徒がでないように、グループ内で順番に発言する。	I give.. I think.. といった表現を正確に使用し、自分の考えを表現することができる。 [外国語表現の能力①]
	Case study2 10min.	途上国における貧困層を想定し、それぞれどのような支援を行うことができるかグループで考え発表する。 【3】【7】		答えが出やすいようにこれまでに使用した表現を使うよう促す。	
まとめ 10分	Wrap up 10min.	本時の振り返りを行い、国際協力についての支援のあり方について自分の意見を英文で表現することができる。 自己評価カードに振り返りを記入する。【6】			

(2) 授業の振り返り

(よかった点)

- ・「日ごろの授業の中に国際理解教育を」というねらいを達成することができた。
- ・実際に授業者が現地に行ってみてきたことを話すことができた点が生徒の興味を高めるきっかけとなった。
- ・単語バトルカードやワークシートなどを使い、国際協力に関する単語を段階的に学習できたことで、グループ活動の活性化を図ることができた。
- ・グループワークの際に全員が参加できるように4択カードを使用したことで意見交換が活発化した。
- ・授業の前半に食べ物やキャラクターなどといった身近なことから話題を広げたことで国際開発を自分のこととして生徒に考えさせることができた。

(改善点)

- ・「被支援国＝かわいそう」という図式から抜けきれなかった。今後は対等な立場で相互依存の価値を高めることについての発問や課題を考える必要がある。

(3) 使用教材

授業内で使用した写真(一部)



(4) 参考資料等

外務省「キッズ外務省ホームページ」<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/>> (2016年11月20日)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

(授業後の生徒アンケートより)

- ・人を助ける方法は一つではなくいろいろな選択肢があるのだと分かった。
- ・日頃テレビなどで世界の状況を見ますが、実際に行動にでている人は少ないと思います。その中で、人のため、国のためと一生懸命に働く人、勉強する人がいて、その人を支えている人もいて、とてもすごいと思いました。
- ・世の中には私が当たり前に行っている生活ができずにいる貧しい人々がたくさんいることも今回の授業でより詳しく知ることができました。私は将来人のためになれることをしてみたいと思っているのでボランティア活動に目を向ける良い機会でした。
- ・ボランティアの活動は知っていたが、様々な仕事があって日本人もがんばっていることは知らなかった。先生などになって教えるには資格がいるのかを知りたい。
- ・国際的なことを知り私たちが幸せであり、幸せな人が手を差し伸べなければ、貧しい人々は何も変わらないんじゃないかと思った。もう少し大人になったら私もボランティア活動に参加してみたいと感じました。
- ・勉強をするためにはお金がいる、お金を手に入れるためには仕事をする、仕事をするには勉強が必要だと思う。1つでも抜けていたら、貧しい人々は貧しいままだと思う。私はそんな貧しい人々に何か手伝えることはないか考えて、国際ボランティアの人のように活動したい。
- ・かわいそうな人たちがいるから助けてあげよう、だけではなく、何が原因でそうなったかを知りたいと思った。またお金についても、もっと違う考え方があると思った。英語の授業としては自分の意見の伝え方の勉強になるから良いと思った。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(計画)

今回の授業実践においては、日本と海外のつながりや国際協力関係をいかに日頃の授業において指導を行い、国際的な市民感覚を育てていくかに焦点をおいた。教師海外研修として訪れたタイにおいては地理的にも歴史的にも日本と関係の近い国であり、国際理解の授業としては比較的取扱いやすい国であると感じていた。しかしながら実際に授業計画をする際には、なぜタイなのかという理由づけをする点で工夫する必要があった。

例えば現在使用している教科書においては基本的には英語圏であるアメリカ・イギリス・オーストラリアが中心となり、非ネイティブ国としてはインドが取り上げられている。インドにおいても英語を公用語としているため、第二言語として英語を使用する国の文化が取り上げられるケースは稀である。反面メディアから入る情報から食文化や大衆文化については一部ではあるが手に入れる機会も多く、こうした傾向が各国のイメージを作り上げている現実もある。授業においてはこうした一般的な外国に対するイメージと現実のギャップを埋めることが、生徒の興味関心を高め導入として有効であるのではないかと考え、海外研修において自ら得た情報をこのギャップの修正に使用することとした。

(実践)

「日頃の授業で国際理解教育を行う」ことを目的としたため、国際理解教育として単発で行うのではなく、教科指導の一部として実践を行った。また職場体験も同時期に行われる関係で、自分たちの夢とタイに住む人の夢をテーマとして扱い、その中でタイの生活や日本との関係について理解を深めていった。(詳しくは4～7を参照)

(検証)

授業の振り返りとして「自己評価カード」を使用している。タイについての導入は青年海外協力隊として働く人々と、クロンイ地区から通訳として職業を得ることのできた女性のエピソードを使用した。初回は共通して知っている知識も少なかったため反応は小さいものであったが、授業を進めるにつれ、知識や理解が深まるにつれ生徒一人一人が考えをもつことができているのが印象的であった。「支援の方法について考える」についても英語で考え発表することができ、今後の教科指導の大きな収穫となった。しかしながら当初の目的であった「相互依存の関係について考える」については支援されている国、貧しい国であるといった考えから抜け出すことができなかった。

(改善)

今後の方策としては「世界がもし100人の村だったら」や「貿易ゲーム」といった開発教育の教材を使用し、基本的な国際開発の考え方について理解を進める必要がある。その中で生徒からの反応をよく観察し、一方的な支援で終わらずに将来的な国際関係を見通して関係をつくることの大切さや、多角的に物事をみることの大切さについて理解を進めていきたい。

10 教師海外研修に参加して

今回研修に参加して改めて実感したことは、現地に赴くことでしか得られない情報の多さである。クロンイ地区を始めとする各訪問先で出会った人々の温かさや、支援に携わる多くの人たちの熱意、子供たちの成長しようとするエネルギーや興味など、その場でしか理解できないことがとても多かった。こうしたことをメディアのフィルターなしで体感することができたこと、そして志を共に仲間と考える時間を共有することが何より得難い体験であったように感じる。特に人との出会いについては自らの教科である外国語を指導し、学ぶことの価値がより一層明確となった。どんな時も人々との関係が大切であり、言葉を理解することはその人を理解することであると、学生時代の恩師の言葉を思い出した。今あるタイとの友好な関係もこれまでに技術的な支援・金銭的な支援だけでなく、人としてよい関係を築いてきてくれた先人たちのおかげである。今後はこの研修をきっかけとして、自らが生きた教材として生徒とたちと共に考え、これからの時代をより充実したものに、これからの世代をよりたくましく育てていくことが何よりの使命であると考えます。

本当に必要とされる支援とは

JICA(国際協力機構)の夏季教員海外研修プログラムの一員として、7月24日から8月2日までの10日間タイでの国際理解教育研修を行った。今回の研修プログラムでは貧困地域だけでなく、港や浄水場のインフラ整備やその経営、福祉や教育に関する事など、幅広く視察できたことで、タイの諸課題と協力・支援の必要性を結びつけながら、国際協力の全体像を見ることができた。特に国際理解教育・グローバル教育といった視点においては、国際開発における相互依存関係について理解を深めることができた。

視察した中で特に印象的であったのがクロントイ地区である。この地区にはタイの発展に伴い農村部から都市部へ流入してきた人々の人口密集コミュニティがあり、タイ最大のスラムを形成している。またスラムの中には NPO 法人もあり、例えば今回訪れたシーカ・アジア財団はバンコクの都市スラムや農村の貧困地域などの子どもたちの生活の質向上を目指し、教育支援活動を行っている。スラムでの生活は私たちの目から見たら不衛生であり、住民には直ちに支援が必要であると短絡的に考えてしまう。しかし現地の人と交流を持ち、研修の中で支援の知識や実情を理解したことで、単純な資金援助やインフラ開発では本当の支援とはならないことに気がついた。特にタイには近隣や家族で共に助け合う相互支援の伝統的文化がある。こうしたコミュニティ性を様々なプログラムから学んだことから、本当に必要とされる支援とは何なのかを考えさせられる契機となった。

日頃、日本の生徒たちと日々接する中で懸念されることは、直接その国の人に出会ったり、その国の文化を経験したりしたわけではないのに、外国人に否定的なイメージを持っている姿である。東京も近年、外国人労働者の数は確実に増加してきている。労働者だけでなく、外国人観光客の数も確実に増えてきており、生徒たちが外国人と接する機会が増えることは容易に考えられる。様々な場面で、外国の人々と助け合わなくてはならない場面があるはずであり、「受け入れ、尊重する気持ち」を持ち、共に助け合おうとする力が彼らには必要になってくる。違いに驚いても、人として知り合い、文化や習慣の違いを理解することで受け入れることができるということを生徒にも知って欲しい。自分の世界と異なるものに触れることは、異なる価値観に触れることであり、それは多角的に物事を考える力になる。受け入れ、尊重するためには、多角的に物事をみるべきであるということにもなる。違いが受け入れられるか受け入れられないかは人それぞれであるが、それはまず自分で接してから考えてみるべきであるということを、自分の経験から伝えたい。